

怪物表象と差別構造の変遷

—『フランケンシュタイン』、『ハリー・ポッター』、『トワイライト』における
比較分析—

吉田 莉理

序論

文学における怪物の表象は、単なる異形への恐怖にとどまらず、時代ごとの社会的価値観や差別構造を可視化する役割を担ってきた。怪物は人間ではないものとして描かれるが、その異質性は多くの場合社会的他者のイメージと結びつき、共同体の境界を際立たせる機能を果たしている。そこには科学への不安、倫理的責任の揺らぎ、さらには人種・ジェンダー・階級といった差別構造が反映されており、怪物表象は社会の不安を映し出してきた。本論文が定義する怪物性とは、生物学的な異質性そのものではなく、社会によって構築され、排除や選別の基準として機能する属性を指す。怪物性は、時代や文化圏によってその意味や作用を変えながら、社会的他者のイメージを具現化してきた。したがって、怪物表象を論じることで、社会がどのように異質な存在を位置づけ、受容あるいは排除をしてきたのかを読み解くことができる。

19世紀の怪物像は、創造主の倫理的欠落や科学への不安と結びついていた。これに対し、現代ファンタジーでは、より複雑な社会的スティグマや共存の可能性に関するメタファーとして描かれている。怪物は社会に適合し得る存在として描かれる場合もあり、その受容の条件や限界が物語の中で示されている。この変化の過程において、怪物表象は時代の社会的背景を反映しながらその意味を更新してきたといえる。

こうした観点から、本論文では『フランケンシュタイン』、『ハリー・ポッター』シリーズ、および『トワイライト』シリーズという三つの英米文学作品を比較分析し、時代ごとに怪物性がどのように描写され、排除され、あるいは選択的に受容されてきたのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、第1章で『フランケンシュタイン』における創造と排除の構造を考察し、第2章で『ハリー・ポッター』シリーズに表れる偏見や差別の問題を検討し、第3章では『トワイライト』シリーズにおける怪物性の選択的受容の構造を分析していく。以上の比較を踏まえ、怪物表象が社会的価値観と権力構造を反映しながら変化してきたことを明らかにし、その中で怪物性が持つ意義を整理する。

第1章 怪物表象の古典的起源 『フランケンシュタイン』における創造と排除の構造

本章では、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*, 1818) を取り上げ、文学作品における怪物的存在の古典的な基盤を考察する。19世紀初頭の社会的・文化的背景の中で生まれた本作は、科学的創造と倫理的な問題を描くと同時に、共同体が異質な存在を受け入れられない構造を描き出している。創造主による創造と拒絶は排除の起点を示し、社会の偏見は怪物を共同体の外部へと追いやる力として機能する(佐々木 48-53)。そして、女性の伴侶の創造と破壊に見られるジェンダー的視点は、怪物表象をより多層的なものにしている。こうした分析を通じて、本章は『フランケンシュタイン』を科学・倫理・社会的秩序・ジェンダー的視点が交わる場において怪物的存在の原型を提示した作品として位置づける。なお、本論文では、主人公である科学者をヴィクターとし、彼によって創られた創造物については、作中の描写に即してモンスターと表記する。

1-1 19世紀初頭の科学・社会背景と『フランケンシュタイン』の誕生

ヴィクターの行動と、モンスターが経験する排除の構造は、本作が誕生した19世紀初頭のヨーロッパが抱えていた科学的、思想的、社会的な状況と密接に結びついている。当時のイギリスは、産業革命による経済構造の変化と中産階級の台頭が進む一方で、政治の支配層は依然として貴族・ジェントリーが占めており、旧来の社会秩序は再編を迫られていた(鈴木 125-30)。こうした不安定さの中で科学技術への楽観的な信念が頂点に達した時代であった(伊東 19-20)。

作者メアリは、この時代の知的な熱狂を背景に、ヴィクターを知識の追求が倫理的責任から切り離された男性中心的な傲慢さの体现者として描き出した。当時の創造行為を巡る修辞には、「出産というメタファー」を男性主体に適用し、女性の身体的能力を篡奪しようとする傾向が存在していた(武田 29-30)。さらに、Mellorは『フランケンシュタイン』を「女性を排除した男性的出産の物語」として分析し、ヴィクターの創造行為を、こうした男性中心的な価値観の極端な表れとして読み解いている(Mellor)。このように、メアリの作品は、男性的な創造の特権と倫理の欠落を批判的に問い直す試みであった。

加えて、モンスターの運命を決定づけたのはヴィクターの暴走だけではなく、当時の社会的偏見が制度化されていた事実である。18世紀末から19世紀初頭にかけて広く読まれた Lavater の *Essays on Physiognomy* は、顔や身体の形態といった外見的特徴から人間の性格や道徳性を読み取ろうとする観相学的思考を、ヨーロッパ文化に定着させた (Tytler 4–6)。Lavater は“The countenance is the theatre on which the soul exhibits itself”と述べ、外見を内面の直接的な指標とみなしている (171)。Tytler は、小説における人物描写が本質的に観相学的であるにもかかわらず、こうした観点からの批評が十分に行われてこなかったと指摘している (4–5)。

ヴィクターがモンスターの醜さを目の当たりにした瞬間、その内面を顧みず拒絶する行為は、当時の観相学的社会の論理を体現している。さらに、作者自身も 1831 年に出した、改訂版の序文において作品を“my hideous progeny”と呼び、次のように記している。

And now, once again, I bid my hideous progeny go forth and prosper. I have an affection for it, for it was the offspring of happy days, when death and grief were but words, which found no true echo in my heart (Shelley, “Introduction”)

この引用からは、彼女が自らの創造物である作品をおぞましいものとして認め、外見差別のテーマを意識していたことが推測できる。実際、Johnson が指摘するように (186)、ヴィクターによる怪物の創造とメアリによる小説の創造のあいだには、意味深い対応関係があるように見える。

このように『フランケンシュタイン』は、創造と責任が切り離されることの危うさを提示すると同時に、観相学的社会が外見に基づいて他者を排除する構造を明らかにする作品として読める。つまり、創造者による責任放棄の暴力と、社会による外見差別の暴力が重なり合い、モンスターが必然的に排除される状況が作られるのである。次節では、このような社会的背景のもとで、ヴィクターのジェンダー的傲慢さと倫理観の欠落がどのように結びつき、モンスターへの最初の拒絶を生み出していったのかを検討していく。

1-2 排除の起点：ヴィクター・フランケンシュタインによる差別構造の形成

モンスターを創造した直後、ヴィクターはその姿を前にして恐怖と嫌悪に支配され、即座に逃げ去る。「ほとんど尋常と思えないほどの熱意で、この完成を待ち望んできたのです。だが今、それが完成したとたん、美しい夢は消えて、息も止まるほどの恐怖と嫌悪感で胸がいっぱいになったのです」(シェリー 第5章)。この描写からは、彼がモンスターに対して強い拒絶の感情を抱く様子が読み取れる。ここで彼を感じる恐怖は、外見の醜悪さに対する単純な反応ではなく、自分の創造行為が越えてしまった一線に気付いたことによるものだったに違いない。Gupta らが指摘するように (816)、モンスターはヴィクターの抑圧された欲望や恐怖が具現化した存在であり、彼自身の分身として描かれている。重要なのは、ヴィクターが拒絶した怪物性が、自然に存在していたものではなく、彼自身の創造行為とその後の排除の態度によって作り出されてしまったという点である。Punter は、創造主の抱える問題が創造物へと投影される構造が、ゴシック文学に広く見られることを指摘する。彼によれば、もう一人の人間を作り出したいという願望は、創造主自身の人格形成における問題に起因している (Ch.1)。つまり、創造された怪物性は、創造主の内部に潜む不安や抑圧が外在化されたものとして理解できる。

モンスターは人間と非人間、自然と人工、自己と他者という複数の境界を同時に侵犯する存在である。この境界の侵犯は、ヴィクターにとって不安を引き起こす原因となる。彼は科学によって境界を支配し、秩序を維持できると信じていたが、創造物が怪物の姿として現れた瞬間、その支配の幻想は崩れる。彼の「自分がつくりあげたものの姿に耐えられず、部屋から飛び出す」(シェリー 第5章) という行動からも分かるように、ここで生じる不安は結果として創造主としての責任の放棄へとつながっていく。創造と拒絶という両極端な行為は、義務感と恐怖心の対立が表れたものであり、彼の人格の不安定さを示している。さらに、ヴィクターが責任を放棄したことで、モンスターは自らの存在を意味づける手掛かりを失う。創造主と創造物の関係が初期段階で途切れてしまい、本来形成されるはずのつながりが崩れた。この拒絶は、外見に基づく差別的排除の構造として読むことができる。モンスターは異質な存在として位置付けられ、ヴィクターによる拒絶の瞬間に怪物性を背負わされるのである。したがって、モンスターの存在が問題視される以前に、まずヴィクターの倫理的な欠落と責任放棄が物語の中心に深く関わっている。怪物性とは、ヴィクターの主体の崩壊と責任放棄によって生まれたものであると

いえる。次節では、この拒絶が怪物性の形成にどう関わるのかを考察する。

1-3 社会の暴力：拒絶から形成されるモンスターの存在認識

1-2 で確認したように、『フランケンシュタイン』においては、モンスターが怪物として認識される以前に、ヴィクターの責任放棄と倫理的欠落が物語の基盤となっている。では、この欠落が、どのようにモンスターの怪物性を形作っているのだろうか。本節では、怪物性を先天的属性としてではなく、物語中の描写と社会の反応の中で構築される概念として捉え、その過程を考察していく。

まず重要なのは、モンスターの怪物性がヴィクターの視点によって最初に定義されるという点である。ヴィクターは創造直後のモンスターを「わたくしがつくりあげたあの惨めな怪物」、「悪魔のような屍」（シェリー 第5章）と語り、初めから悪魔や死体のイメージによって彼を必要以上に否定的な存在として位置づける。モンスターの姿は確かに異様であるが、その異様さが即座に悪や危険と結びつくのは、創造主の語りが読者の解釈を方向づけるからである。つまり、外見そのものが拒絶を招くのは事実であるものの、その外見が悪や危険、異質性と結びつくのは、周囲の視線によってそこに否定的な意味が与えられるからである。

さらに、怪物性はヴィクター個人の視点にとどまらず、モンスターが遭遇する人間たちの反応によって強化されていく。彼は社会に受け入れられる可能性を模索し、言語を習得しながら人間の道徳に近づこうとする。しかし、彼が姿を見せるたびに人々は悲鳴を上げ、石を投げ、暴力をふるう（シェリー 第11章）。こうした拒絶は、彼の自己認識を変化させていく。モンスター自身が「おれだって優しく善良だったのに、惨めな境遇のために悪魔となったのだ」（シェリー 第10章）と語るように、拒絶された経験が彼を怪物へと変えていったことを示している。Alvarez も“Society’s labelling pushes the Monster to adopt a deviant master status by internalizing his ‘monstrous’ label”（Alvarez）と述べており、社会から与えられた呼称が自己像に深く刻み込まれる過程を強調している。この視点からも、異質性は外見そのものだけではなく、社会的排除や偏見によっても形成されていることが明らかである。社会の視線はモンスターを排除し、その排除が彼の行動を怪物的なものへと導く循環が生じている。

こうした排除が周縁化を強めていく一方で、モンスターは当初、暴力とは無縁の存在

として描かれている点も重要である。Adams が“Frankenstein’s Monster was a vegetarian” (148) と指摘するように、彼の食生活には倫理的側面が表れている。モンスターは飢えと渇きに襲われたとき、木の実や地面に落ちている実を食べ、喉の渇きを小川の水で癒すと語る。やがて火を発見するが、それで焼くのは肉ではなく堅い実や根っこである（シェリー 第 11 章）。さらに伴侶を求める場面では、「おれの食べ物人間とは違う。腹が減っても、子羊や子ヤギを食ったりはしない。どんぐりや木の実で十分栄養が取れる」（シェリー 第 17 章）と述べている。モンスターは、このような無害な生活様式を選び取っているにも関わらず、社会は外見の異質性のみを根拠に彼を怪物として扱い、排除の対象とする。つまり本作における怪物性とは、恐怖が社会的不安の外在化として描かれている。次節では、創造と再生産の恐怖、そして作者メアリ自身の経験を重ねて考察していく。

1-4 書くことと生むこと：伴侶拒絶と怪物性の連鎖

『フランケンシュタイン』を作者自身の女性としての体験と重ね合わせて読み、フェミニズム的課題について論じるという批評の流れがある（武田・武田 83）。Johnson は、本作を“Frankenstein can somehow be read as the autobiography of a woman” (181) と捉え、メアリの書くことへの欲望と、ヴィクターのモンスターを生み出すことへの欲望と重なると論じている（187）。つまり、創造行為が創造主の意図を超えて予期しない結果を招く構造を持つ。こうした制御不能な創造の恐怖は、ヴィクターの伴侶の創造を拒む場面に具体化されている。彼が拒絶するのは、怪物の繁殖を阻止するためであり、そこには自分のコントロール外で再生産が行われることへの恐怖が反映されている。実際、モンスターの姿を見て彼は「あんなやつをもう一人つくるなどと約束したことに気も狂わんばかりになり、激情に身を震わせ」（シェリー 第 20 章）、伴侶を粉々に破壊する。この行動から考察できるのは、彼が恐れているのは単に怪物が二人になることではなく、その結果として子供たちや一族が生まれ、怪物的存在が拡大することである（武田 91）。さらに彼は、伴侶がより危険な存在となる可能性を恐れ、次のように述べている。「まず子どもが生まれることになる。そうなれば、やがて悪魔の一族がこの地球上にはびこって、人間の存在そのものを脅かし、途方もない恐ろしさを与えるかもしれない」（シェリー 第 20 章）。この引用は、女性の身体を制御不能な再生産の場として恐れるヴィ

クターの心情を示している。女性の伴侶は怪物の増殖の象徴として描かれ、ヴィクターの恐怖を正当化している。

こうした拒絶の構造は、メアリの誕生と出産経験とも重なる。彼女は若くして母を失い、さらに自身も複数の子どもを亡くしている（山田 66）。この体験は、生み出すことは必ずしも支配できるわけではないという恐怖と結びつけられ、ヴィクターの創造主としての恐怖に投影されている。本作は、創造と再生産に関する恐怖を可視化し、女性作家が書くことと生み出すことに直面する不安を物語化した作品として読むことができる。

このように、ヴィクターによる伴侶の拒絶は、創造が自身の意図を超えて、制御不能に拡大していくことへの恐怖として読むことができる。親から子へと怪物性が連鎖するという不安は、19世紀の物語にとどまらず、現代社会においても繰り返し現れる。伴侶拒絶の場面は、その不安を象徴的に示しており、モンスターの正体とは何かという問いに発展する。次節では、この問いを基に、モンスターの文化的意味について考察していく。

1-5 モンスターの正体と文化的象徴性

モンスターは、外見的特徴において人種的他者に関する捏造されたイメージを反映した存在である（武田・武田 114）。実際、モンスターが動き出す場面で描写される外見は、その異様さが際立っている。

黄色い皮膚は、その下にある筋肉や動脈の動きをほとんど隠すことはなく、髪の毛は黒く光って流れるようで、歯は真珠のように真っ白です。[中略]目は陰鬱な薄茶色の眼光とほとんど同じ色ですし、やつれた顔やまっすぐ引かれた黒い唇も、やはりおどろおどろしく見えるだけです（シェリー 第5章）

この黄色い皮膚や黒い唇は、病気や死のイメージとしても読める一方で、Mellor はこれを、社会が他者を怪物化する指標として機能していると指摘している（22）。当時、シェリー夫妻と親交のあったイギリス人医師のウィリアム・ローレンスは、アジア人を怠惰、放埒、退廃的、暴力的といった属性に特徴づけており、こうした言説はイギリス社会にアジア人への嫌悪感を蔓延させた。これらの偏見は後に黄禍論¹へ結びつき、アジア人に対する集団的恐怖を形成していく。結果として、モンスターの外見は、当時のイ

ギリス社会が抱えていた人種的ステレオタイプの象徴とみなされるようになった（武田・武田 111-12）。つまりモンスターは、19世紀のイギリスが抱えていた帝国主義的な不安、他者への偏見を反映した存在であるといえる。

物語の結末では、ヴィクターが死ぬ一方、モンスターだけが生き延びる点も重要である。このことは、帝国主義的な恐怖や偏見が簡単には終わらず、社会の中で繰り返し再生産されていくことを示唆しているように読める。さらにモンスターは創造主の名を奪い取り『フランケンシュタイン』として、物語の世界を超えて広く人々の記憶に定着した。以上を踏まえると、モンスターはジェンダー的課題を映し出すと同時に、帝国主義的他者の象徴としても理解できる。こうした側面が重なることで、モンスターは単なる異質なキャラクターではなく、それを怪物化し排除する社会そのものを可視化する存在となっている。

次章では、『ハリー・ポッター』における異質なキャラクターの表象を取り上げ、怪物的イメージが差別構造とどのように結びつき、現代ファンタジー文学における差別構造が文化の中で再生産されていることを明らかにする。

第2章 『ハリー・ポッター』における怪物的存在と社会との共存の限界

本章では、イギリス人作家 J.K.ローリングによる『ハリー・ポッター』シリーズを取り上げ、作品中に登場する狼人間や巨人といった怪物性を持つキャラクターの表象に注目する。彼らの怪物性は、単なる物語上の設定ではなく、現実社会におけるマイノリティへの偏見や排除の構造を象徴するものとして描かれている。魔法という架空の世界観の中に、現実社会に通ずる差別や周縁化の構造が組み込まれて描かれている点は、作品の社会的意義を考察する上で欠かせない視点となる。このような視点を踏まえ、本章では『ハリー・ポッター』シリーズに登場する怪物的存在が、どのように差別や排除の対象として描かれているかを考察していく。

2-1 20 世紀後半のイギリス社会における差別構造の反映

本シリーズが発表された 20 世紀後半のイギリス社会は HIV/AIDS への偏見、移民への排斥、教育現場におけるマイノリティの扱いなど、複数の社会問題を抱えていた (Van Oers 2、奥村 4-8)。一見すると、魔法という「マジカルな側面」は、現実の価値観や規範から解放された自由な世界にも見える。しかし実際には、そうした理想的な世界を提示しているわけではないという批判もある。

The ‘magical’ aspect of the story thus does not introduce or represent alternatives to sexual normativity, as much as it tries to hide the conservatism of Magical Great Britain. As Pugh, Wallace and Bronski emphasize, Harry does emerge from his cupboard, like the homosexual emerges from the ‘closet’ to enter the wizarding world. (Vestić 169-170)

この引用が示すように、魔法界は異性愛規範から解放された理想的な空間のように描かれているが、実際にはイギリス社会の保守性を反映している。この保守性は、特定の社会的マイノリティに対する偏見や排除の構造として物語に表れている。特に HIV/AIDS と性的マイノリティに対する認識は、狼人間の描写に深く関係している。1980 年代初頭、HIV/AIDS は“GRID (Gay-Related Immune Disorder)”と呼ばれ、主にゲイ男性に起

因する病として認識されていた。このような命名や報道姿勢は、感染症に対する偏見と性的マイノリティへの差別が密接に結びついていたことを示している（Herbert）。また、メディアや公衆衛生キャンペーンにおいても、ゲイ男性が恐怖の象徴として描かれることが多く、病気に対する偏見は性的マイノリティへの差別と密接に絡み合っていた（Weston、Duncan）。このような 1980 年から 1990 年代の社会背景を踏まえると、狼人間の表象にはその偏見が色濃く反映されていると考察できる。ローリングは、ルーピンの狼人間という設定（狼化症 lycanthropy）について、次のように述べている。

"Lupin's condition of lycanthropy was a metaphor for those illnesses that carry a stigma, like HIV and AIDS. All kinds of superstitions seem to surround blood-borne conditions, probably due to taboos surrounding blood itself. The wizarding community is as prone to hysteria and prejudice as the Muggle one, and the character of Lupin gave me a chance to examine those attitudes."（Rowling, *Short Stories* 49）

この発言から、ルーピンの設定が社会的スティグマのメタファーとして意図的に構築されていたことが分かる。魔法界が現実社会と同様に偏見やヒステリーに支配され得る可能性を示しており、物語における異質性の表象が、現実の差別構造と深く関連していることが明らかになる。

HIV/AIDS は、医学的には管理可能な疾患と認識され始めていたにもかかわらず、感染者に対する偏見は根強く残り、医療アクセスや社会的支援を妨げる障壁となっていた（Hedge et al. 1）。このような社会的スティグマは、狼人間の描写においてクィアネスに対する排除的な姿勢として物語に反映している（Pugh and Wallace 267）。

一方、巨人族の血を引くハグリッドが象徴するのは血統や身体性に基づく排除である。Goodison は、ハグリッドが「暴力的で野蛮な存在」とみなされる巨人のスティグマを背負わされ、いずれの世界にも完全に属せない境界的存在として描かれている点を指摘している（128, 131）。ハグリッドに向けられる侮辱的な視線や制度的な差別は、人種差別や混血者に対する排除の構造を映し出しており、魔法界における純血主義的な価値観の形成に深く関わっている。

このように、本シリーズにおける怪物性を持つキャラクターの表象は、感染症に対す

る先入観と血統に基づく差別という複合的な差別構造を形成している。ローリングは、こうした差別構造を物語の中に織り込みながらも、必ずしもそれを批判する立場をとっているわけではない（Horne 81）。むしろ、魔法界の持つ保守的な社会構造をある程度前提として受け入れていると考えられる。純血主義者（ヴォルデモート側）を絶対的な悪として描くことで、主人公側の正当性を際立たせており、その手段としてマイノリティの表象が利用されていると読み取れる。この点において、ローリングの物語は差別構造の批判と保守的な価値観の再生産という二重性を孕んでいる。

2-2 リーマス・ルーピン：理性と抑制が求める共存のかたち

ルーピンは、狼人間という怪物的な存在でありながら、理性的な教師として生徒からの信頼を集める人物である。作中では、制御可能な異質性が強調されており、社会との調和を目指す姿勢が際立っている。彼の慎重な言動や感情の抑制、さらに変身を防ぐための薬の服用は、社会的スティグマに対する防衛的な振る舞いとして描かれている。特に、外見では判別できない異質性（障がい）に対して社会が無害性・安全性の証明を求めるといった構造は、現実の障がい者の経験と重なる。実際、障がい者が支援や配慮の必要性を疑われ、その根拠を説明するよう求められる事例が報告されている（小牧）。このような事象は、ルーピンの描写にも表れている。彼が狼人間性をハリーたちに告白する場面では誠実さと倫理観を示す一方で、異質性を持つ者に対して社会が説明責任や自己開示を強いる状況が浮き彫りになっている。ただし、この告白は彼の主体的なものではなく、ハーマイオニーの推理という外部からの指摘によるものである。

「話を聞いてくれ。頼むから！」ルーピンも叫んだ。「説明するから」

痛いような沈黙が流れた。今やすべての目がルーピンに集まっていた。ルーピンは青ざめてはいたが、驚くほど落ち着いていた。[中略]「わたしが狼人間であることは否定しない」（ローリング、『炎のゴブレット』 446）

この冷静な自己開示は、ルーピンが自身の怪物性を隠すべきものではなく、説明すべきものとして捉えていることが読み取れる。彼は、自分の怪物性を他者に説明することで、信頼を築こうとしている。その姿勢は、社会の否定的な視線に対する恐れと、内面

に抱える葛藤の両方を反映している。魔法界において狼人間は制御不能な存在として一括りにされ、社会から距離を置かれている。ルーピンはそのような認識の中で生きてきたことで、無意識のうちにその価値観を内面化しているように見える。彼の慎重な振る舞いは、他者への配慮であると同時に、異質性を制御することでしか社会に受け入れられないという意識の表れでもある。

また、ここでいう制御とは単に肉体的な変身や暴走を抑えることだけではなく、日常生活全般における行動や感情の管理も含まれている。ルーピンは、社会が求める穏やかで無害な人物像に合わせるため、自分自身の在り方そのものを管理しているのである。このような多層的な制御は、彼の責任感によるものだけでなく、周囲からの恐怖や不当な評価を回避するための手段としても機能している。怪物性を見せないことが、彼にとって社会に受け入れられるための前提条件になっているのである。

こうした制御を徹底した姿勢は、最終的に彼自身の職業選択にも表れている。ルーピンは、hogwartsという職場から退任させられるのではなく、自らの意思で辞職という決断をした。

「明日のいまごろには、親たちからのふくろう便が届きはじめるだろう。ハリー、誰も自分の子供が、狼人間に教えを受けることなんて望まないんだよ。それに、昨夜のことがあって、わたしも、その通りだと思う。誰か君たちを噛んでいたかもしれないんだ。〔中略〕こんなことは二度と起こってはならない」(ローリング、『炎のゴブレット』 553)

彼の辞職は、単なる責任感に基づく選択という解釈に留まらず、社会的圧力が生み出した、差別される前に自ら身を引くという主体的な服従である。彼の行動は、狼人間が教育現場に相応しくないという社会全体に拡がる不寛容な空気や先入観を、被差別者自身が肯定してしまうという構造を示している。形式的には自由な選択に見えても、実質的には社会的圧力によって強いられた自己制御であり、差別構造に対する内面化された服従である。彼の責任感ある行動は、結果として魔法界の偏見を強化する役割として機能してしまう点に、この差別構造の根深さが表れている。ルーピンの事例は、被差別者が社会に受け入れられるために強いられる、倫理的・身体的な自己管理と、その先にある

差別構造の内面化という、見えにくい差別の側面を浮き彫りにした。

2-3 フェンリール・グレイバック：逸脱と暴力が正当化を生むとき

ルーピンが、内面化された偏見と自己規制によって社会との共存を模索する存在として描かれているのとは対照的に、グレイバックは怪物性そのものを暴力の手段として利用し、社会からの排除を正当化する存在として描かれている。彼は狼人間でありながら、理性や抑制を持たず、むしろ積極的に人間を襲うことで狼人間の恐怖を広めようとする人物である。魔法界でも特に危険視される存在であり、ヴォルデモート陣営として行動する中で、怪物性を意図的に誇張し、異質性を武器として用いている。彼の登場場面は常に暴力性を伴っており、異質性が社会的脅威として描かれる構図を示している。

「うまそうな女だ…何というご馳走だ…」

声の主が誰だかわかり、ハリーは胃袋が宙返った。フェンリール・グレイバック、残忍さを買われて、死喰い人のローブを着ることを許された狼人間だ（ローリング、『死の秘宝』 89)

この描写から読み取れる通り、彼はルーピンのような共存を前提とせず、狼人間性をむき出しのまま行動している。これは、怪物性が制御不能で危険であるという社会の固定観念を強めると同時に、狼人間全体に対する排除の正当性を強化する役割を果たしている。注目すべきは、彼の暴力が単なる狼人間性による生理現象ではなく、意図的な戦略であるという点である。例えば、ビル・ウィーズリーに対する襲撃は満月の夜ではなく、変身していない状態で行われており、彼の暴力が意図的な行為であることを示している。

「ビルはグレイバックに襲われたのよ。どんな後遺症があるか、はっきりとわからないの。つまり、グレイバックは狼人間だし、でも、襲ったときは変身していなかったから」（ローリング、『謎のプリンス 下』 445-47)

この描写は、グレイバックの暴力が単なる生理的な変身の本能的な反応ではなく、変身

していない状態でも行使される攻撃手段であることを示している。つまり、彼の怪物性は身体的な制御不能さに起因するものではなく、自ら選び取った暴力性として描かれている。このような描写は、異質性が理性や共存の可能性を持つ者ではなく、意図的に危険な存在として演出される存在であるという構図を示している。その結果、物語内では狼人間全体が危険な存在として一括りにされ、社会的排除の正当性が強化されることになる。

さらに、彼の狼人間としての行動には、異質性の再生産という狙いが見られる。例えば、子供を嚙んで周囲から孤立させるというやり方は、その象徴的な例である。「グレイバックは子供専門でね…若いうちに咬め、とやつは言う。そして親から引き離して育て、普通の魔法使いを憎むように育て上げる」(ローリング、『謎のプリンス 下』

21) という台詞からも、グレイバックが意図的に社会への敵意を植え付けようとしていることが読み取れる。この行動は、彼が単なる衝動的な捕食者ではなく、差別と排除の連鎖を作り出そうとしていることを示唆している。彼が生み出す被害者は、社会に受け入れられず孤立し、結果的にグレイバックと同じ価値観、つまり社会への敵意を内面化させられていく。

ここで、ルーピンとグレイバックの対照性が明らかになる。ルーピンの自己抑制は被差別者が自ら差別を受け入れる内側からの抑圧であり、グレイバックの暴力性は、魔法省などの支配的な権力が狼人間全体を社会から隔離することを正当化するための口実として機能する。特に、魔法省が定めた「狼人間の行動綱²」や「狼人間登録簿³」といった強制隔離策は狼人間を社会的に孤立させ、経済活動や人間関係から締め出した。この制度的な差別の結果として、グレイバックのような暴力的な思想が形成されるのである。

さらに、グレイバックの描写は、魔法界における異性愛規範や血統に基づく価値観への挑戦としても読み解くことができる。彼の行動は、家族や子どもの保護、再生産といった社会的規範から逸脱するものとして描かれており、その点において、魔法界の正常性の枠組みを照らし出す存在となっている。Vestić は、“Greyback specializes in children ... Bite them young, he says, and raise them away from their parents, raise them to hate normal wizards” (171) と述べ、グレイバックが意図的に支配的な価値観への敵意を育てる空間を作り出していることを指摘している。このような描写は、彼の空間が逸脱

への恐怖と結びついた否定的なクィア性の象徴として機能していることを示している。

このようなグレイバックの反社会的な空間の創出を、Halberstam が「家族や異性愛、そして生殖という制度に対抗して形成される時空間のクィア的使用」(“Queer uses of time and space develop, at least in part, in opposition to the institutions of family, heterosexuality, and reproduction” (Ch. 1)) と定義しているクィア・スペースと重ねて考察する。この定義に基づけば、グレイバックが子どもを親から引き離し、魔法界の秩序に敵意を植え付けようとする行為は、クィア・スペースの創出と解釈上重なる。グレイバックにおけるクィア・スペースは、Halberstam が示すような肯定的な異質性の場としては描かれてはいないが、特に、噛むという行為は、身体に痕跡を刻むことで規範的な身体の一貫性を破壊し、社会的アイデンティティを変容させる点で、Halberstam が論じるクィア的实践と重なる側面を持つ。こうした描写は、彼の空間が危険視される異質性として強調され、排除の根拠として機能していることを示している。つまり、彼の存在は、差別構造が単なる暴力や感染のリスクだけでなく、規範からの逸脱そのものに根差していることを示している。暴力的な怪物という社会の固定概念を体現することで、魔法界の支配的な価値観の外部として位置付けられ、差別の口実を社会に提供する役割を果たしているのである。

このように、ルーピンとグレイバックは、どちらも狼人間でありながら、全く異なる形で社会と向き合っている。ルーピンは、自分の異質性を抑え込み、理性と慎重さを持って魔法界の秩序に適応しようとする。その姿勢は、差別される側が自ら規範に合わせようとする、見えない苦しみの表れでもある。一方でグレイバックは、その異質性を向き出しにし、暴力によって社会の規範を逸脱する存在として描かれる。その姿は、Halberstam が語るクィア的な実践とも重なる部分を持ちながらも、物語の中では肯定的に描かれることはなく、恐怖と嫌悪の対象として位置付けられている。この対照は、クィア的な存在が社会に受け入れられても拒まれても、異なる形で抑圧されるという構図を浮かび上がらせる。

2-4 ルビウス・ハグリッド：聖者と野人の狭間

狼人間が感染という後天的な要因による差別のメタファーであるのに対し、ルビウス・ハグリッドは、巨人族とのハーフという先天的な属性を理由に差別される存在であ

る。このような描写は、魔法界の差別構造が異なる種類の抑圧によって成立していることを示している。ハグリッドは学生時代、冤罪によって退学処分を受けた過去を持つが、それ以降も巨人族の血を理由に、社会的地位や教育の場から排除され続けている。これは、魔法界の差別が個人の行動ではなく、生まれながらの特徴によって再生産される構造的なものであることを示している。

魔法界では、巨人族は一般的に知性が低く暴力的な存在という固定概念によって認識されている。さらに、ハグリッドの巨体や危険な生き物への愛好が、周囲から見れば巨人族の持つ制御不能な野蛮さを裏付けるものとして偏見を強化していく理由となっている。加えて、異母弟のグロウプの存在も、この偏見を助長する一つの要因である。グロウプは巨人族の血を色濃く受け継いだ存在として登場し、言葉を話すことができず、暴力的な行動をとることもあり、魔法界が抱く巨人＝理性を持たないという先入観を体現するような描写がされている。しかし、ハグリッドが彼を隠し、言葉や礼儀を教え込もうとする行為は、単なる家族愛ではなく、巨人族の血を引く者も、理性と社会性があるという自身の存在の正当性を証明しようとする努力として読み取ることができる。これに対し、ハリーやハーマイオニーでさえもグロウプの知性や制御の可能性を疑っている描写からは、否定的な先入観が個人の友情や信頼を超えて社会全体に深く浸透していることを示している。このような価値観がさらに制度的に作用するのが、ドローレス・アンブリッジによる魔法生物飼育学の授業の査察の場面である。彼女の査察は、教育者としての能力ではなく、血筋そのものを問題視し、ハグリッドを侮蔑の対象とした。これに対し、ハーマイオニーは以下のように批判している。

「あの人が何を目論んでるか、わかる？混血を毛嫌いしてるんだわ。[中略] お母さんが巨人だというだけで。それに、ああ、不当だわ。授業は悪くなかったのに」(ローリング、『アズカバン 下』 53)

このハーマイオニーの発言は、ハグリッドの排除の背景が教師としての能力ではなく、人種や身体的特徴への嫌悪に基づいていることを示している。アンブリッジの査察は、属性への偏見を能力不足とすり替えることで、差別を表面的には正当な判断として扱われる仕組みを示している。ハグリッドが身体的特徴を理由に社会的な場から遠ざけられ

る構造は、1990年代イギリスで顕在化していた、人種・民族的マイノリティに対する教育現場や公的機関における排他性とも重なる。

彼の描写は、単なる現代的な混血アイデンティティの比喩に留まらず、中世文学における「巨人」「ワイルドマン（野生人）」「聖者」といった相反する要素を一身に体现する図像学的な系譜にも位置づけられる（Goodison 126）。この聖者的な優しさと、巨人としての異質な血統という矛盾した属性の体现により、魔法界の排除の構造が持つ非論理性を明らかにしている。なぜなら、彼はルーピンのように内面的な自己規律を通じて社会との共存を目指す存在ではないからである。むしろ、個人の行動や能力とは無関係に、生まれ持った属性によって社会的な居場所を奪われる存在として描かれている。このように描かれるハグリッドの存在は、魔法界の排除の構造が、危険な行動（グレイバック）や感染のリスク（狼人間全体）だけでなく、異質な血筋そのものにまで向けられていることを示しており、差別の多層的な構造を浮かび上がらせている。彼の事例は、個人の能力や行動に関わらず、先天的な属性（血統や身体性）のみによって社会的排除が再生産されるという、構造的な差別の属面を象徴している。

本章では、病や障がいのメタファーとしての狼人間、そして血筋に基づく差別の対象としての巨人に注目し、魔法界における差別構造を読み解いてきた。これらのキャラクターは、単なる怪物的存在ではなく、社会に根付く差別や排除の構造を象徴する存在として描かれている。その描写は、現実社会の不平等や周縁化のあり方を多層的に映し出している。特に、1980～90年代のイギリス社会において顕在化していた、HIV/AIDSへの偏見や性的マイノリティへの差別、移民や混血者に対する排除の構造は、物語における狼人間や巨人族の描写に色濃く反映されている。『ハリー・ポッター』シリーズは、ファンタジーという形式を通じて、複雑な差別構造を物語に組み込み、当時の読者、特に若年層に対して、権力と偏見の関係性を考える視点を提供した（Jacobs）。魔法という非現実的な世界観の中に、現実の社会問題を織り込むことで、物語は教育的かつ批評的な役割を果たしている。

第3章 『トワイライト』に見る社会的理想と怪物的存在の位置付け

第1章では、『フランケンシュタイン』における創造と排除の構造を確認し、第2章では、20世紀後半のイギリス社会における差別構造を反映した『ハリー・ポッター』の異質な存在に注目した。いずれも、怪物的存在が周縁化され、排除や抑圧の対象として描かれていた。第3章では、ステファニー・メイヤーの『トワイライト』シリーズを取り上げ、怪物的存在が排除されるのではなく、特権的な存在として扱われる描写に注目する。

吸血鬼として登場するカレン家は、社会的に理想化された存在として描かれている。ベラはその異質性を恐れるのではなく、受け入れたいと願う。こうした描写は、怪物性が特定の文化的条件の下で肯定的に扱われる可能性を示している。一方、ジェイコブは先住民の血を引く存在として、野性的で制御の難しいイメージと結びつけられている。ベラは、白人性と理性を象徴するエドワードと、先住民の血を引き野性的なイメージのジェイコブという、異なる文化的背景を持つ二人の間で選択を迫られる。最終的にエドワードを選ぶ展開は、物語が白人性や中産階級的価値観を肯定していることを示しており、怪物性の描写が人種や階級と深く関係していることを浮かび上がらせる。

ではなぜ、同じ怪物的な存在でありながら、一方は肯定的に描かれ、一方は境界的な存在として扱われるのか。また、その異質性が排除ではなく理想化されるとき、どのような判断基準に基づいているのか。本章では、それが示す文化的・社会的な構造に注目し、怪物性と特権の関係を検討していく。そして、本作品における特権的な怪物の描写が、第1章の『フランケンシュタイン』や第2章の『ハリー・ポッター』で示された排除の構造とどのように対照的であるかを比較し、現代ファンタジーにおける怪物性の描写の変遷を総合的に考察する。

3-1 白人性と美の結びつき

『トワイライト』シリーズにおける怪物的存在は、アメリカ社会における人種的ヒエラルキーや美の規範と密接に結びついた構造の中で描かれている。吸血鬼として描かれるカレン家は、白く洗練された外見と裕福な雰囲気の家であり、白人中心の美の理想を体現する存在として提示される。Watkins は、“*Twilight doesn’t just ignore race—it*

builds a world where whiteness is ideal” (9) と述べ、作品が白人性を標準として中心化し、非白人キャラクターを周縁化している構造を批判している。

このような白人性の理想化は、吸血鬼化の過程そのものにも表れている。本シリーズにおいて多くの場合、吸血鬼になることで肌の色素が失われ、白く輝くような外見へと変化する。この描写は、美しさと白人性が結びついた価値観の下で、吸血鬼化が価値のある存在への昇格として提示されているとも解釈できる。この設定は、Phoenix が論じる肌の色が美の基準や社会的価値と結びつく構造に通じている (102-103)。吸血鬼化が、白くなることと結びつくことで、怪物性の理想化が肌の色に関するヒエラルキーを再生産する形で表現されている。こうした描写は、異質な存在であるはずの怪物が白人性と結びつくことで理想化されるという逆接的な構造を示しており、白人性を美や力の象徴として位置付ける価値観を反映している。

一方、狼男として描かれるキラユーテ族⁴は、身体的に強く、集団的に行動し、衝動的で野性的な存在として描かれている。Reimer は、ベラの視点を通じて先住民表象が歴史的ステレオタイプに基づいて描かれていると指摘し、“how these factors reduce Native Americans to regressive stereotypes and promote white supremacy” と述べている。この指摘は、キラユーテ族が狼男として描かれる際に、衝動的で野性的なイメージが強調され、物語の中で境界的な位置に置かれている構造と深く関係している。

このように、本シリーズにおける怪物的存在は、当時のアメリカ社会における人種・階級・美の規範を反映し、そうした社会の枠組みを可視化する装置として機能している。以下では、ベラ、エドワード、ジェイコブという 3 人のキャラクターに注目しながら、彼らの異質性がどのように制度的・文化的な構造と交差して描かれているかを検討する。

3-2 エドワード・カレン：理性・抑制・美の象徴

怪物性が社会的理想像に適合することで受容される構造を考察するために、本節ではエドワードに注目していく。彼は吸血鬼という異質な存在でありながら、理性・品位・美といった理想像を体現することで、社会に受容される怪物性を示している。その具体的な例が、彼らが選択する菜食主義（ベジタリアン）である。これは人間ではなく動物の血を採取することであり、吸血鬼としての本能的な衝動を抑え、道徳的・社会的な規

範に適合しようとする姿勢を示している。エドワードはこの生活様式について以下のよう

ばくたちは人間が豆腐と豆乳で生活するようなものだと思ってる。自分たちのことを“菜食主義者“といってるんだ。[中略] のどの渇きが完全に満たされるわけじゃないけど、がまんできるだけの体力はつくし、たいていは問題ない。
(メイヤー、上 239)

この説明からは、彼らが本能的な衝動を抱えつつも、それを理性と意志の強さで抑制し、無害な存在として振る舞おうとしていることが分かる。同時にこの選択は、怪物性が排除されるのではなく、特定の条件の下で社会的な枠組みに統合される可能性を示している。この菜食主義という選択は、第1章で論じた『フランケンシュタイン』のモンスターの姿勢と重なる。モンスターもまた、創造主から拒絶された後、肉食を避けて無害性を示そうとした。しかし、モンスターの菜食主義は、社会的排除の状況下では受け入れられなかった。これに対し、カレン家の菜食主義は彼らが人間社会に溶け込み、理想的な存在として受容されるための条件として機能している。つまり、怪物的存在の受容の条件が、19世紀の無害性の証明をもってしても満たされなかったのに対し、現代においては倫理と美による自己管理がその条件として確立したことが分かる。

このような抑制された怪物性は、彼の身体的描写にも表れている。エドワードの肉体は、暴力的で恐ろしい存在ではなく、理性の象徴として理想化されている。彼の肌は、石のように冷たく、太陽の光を浴びると「真っ白で、キラキラ輝いていた。まるで数千のダイヤモンドの粒が埋め込まれているみたい。大理石のように滑らかで、クリスタルみたいにきらめく、未知の石材で作られた完全無欠の彫像だ」(メイヤー、下 7-8)と描写されている。この描写は、19世紀の吸血鬼文学に見られる恐怖や死といった従来の吸血鬼像とは異なり、怪物性が美と結びついた形で提示されていることを示している。例えば、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』では吸血鬼は人間社会への脅威として描かれる。一方でエドワードは、理性的で美しく、恋愛対象としての魅力も持つ存在として提示されている。彼の外見は人間離れした美の象徴であると同時に、危険でもある側面を持っている。ベラは「こんなに美しい人が現実にいるなんて、とても信じられ

ない」と感じるほど、エドワードの美しさに圧倒される（メイヤー、上 113）。また、エドワードは自らの危険性を自覚しており、「ぼくがほかのだれでもない君にとっていちばん危険な存在だってことを絶対に忘れちゃいけない」とベラに警告する場面もある（メイヤー、下 15）。このように、エドワードの身体は理性と危険、超越性と異質性が共存しており、物語における受容される怪物の象徴的な存在となっている。この描写は、Lindén が指摘するように、19 世紀小説における抑制された男性性の再演としても読める（215）。彼女は、エドワードが『ジェーン・エア』のロチェスターのような「道徳的美徳と欲望の葛藤を体現する男性像」として描かれていると論じており、彼の怪物性は近代的男性性の理想像と重なっている。つまり、エドワードの抑制された怪物性は、単なる吸血鬼としての性質ではなく、社会的に理想とされる男性像を反映したものである。こうした抑制された欲望と道徳的葛藤の構造は、近代文学における理想的な男性像として描かれてきたものであり、エドワードはその構造を現代的な形で体現している。

また、カレン家の描写には、秩序・節制といった価値が強調されており、彼らの共同体は白人性や中産階級的な規範の象徴として提示されている。Watkins が指摘するように、シリーズ全体は白人性や中産階級的価値を理想化し、エドワードはその中心的体現者である（13-14）。さらに、Zurutuza は、吸血鬼という存在そのものが西洋資本主義における白人男性性の象徴として構築されていると論じており（541）、エドワードはその構造を再生産する役割を担っている。

このように、エドワードの怪物性は、単なる個人的な葛藤ではなく、白人性・階級といった社会的構造の中で管理され、受容される存在へと変容していく。彼の異質性は、暴力性や不安定さを抑制されたうえで、道徳性や社会的秩序に適合することで、魅力的な存在として描写されている。怪物性は排除されるのではなく、特定の条件のもとで社会的秩序に組み込まれ、理想化される可能性を示している。こうしてエドワードが理想化された怪物性を体現していたのに対し、次に扱うジェイコブは、同じ怪物的存在でありながら社会的秩序に組み込まれず、周縁化された存在として描かれている。

3-3 ジェイコブ・ブラック：理想と排除を映す者

怪物性が物語の理想像から外れる場合、それはどのように排除の対象として判断され

るのか。本節ではジェイコブに注目し、彼の描写を通じて、怪物性の選別が人種的・文化的な価値判断に基づいて選別される構造を検討する。先住民の血を引く彼は、野性的で衝動的な怪物性と結びつけられており、秩序の外に置かれた境界的な存在として描かれている。その描写は、物語における排除の構造を明らかにする手がかりとなる。その一例として、彼の外見の描写に注目すると、怪物性がどのように異質なものとして位置づけられているかが見えてくる。

ジェイコブは、長く艶のある黒髪を後ろで束ね、滑らかな茶褐色の肌と深い黒い瞳を持つ彫りの深い顔立ちの少年として描かれている（メイヤー、上 154）。このような外見は、物語の中で彼の異質性を際立たせる役割を果たしており、彼が先住民であることを強く印象づけるとともに、野性的な存在としての位置付けを強化している。この描写は、エドワードの「大理石のような肌」「彫像のような美しさ」といった冷たく抑制された美の描写とは対照的であり、両者の対比は、異質性がどのような美意識や社会的価値のもとで理想化されるかを浮かび上がらせる。

この描写の差異は、人種的ステレオタイプの再生産としても読むことができる。すでに Watkins が指摘しているように、『トワイライト』シリーズは白人性を理想として中心化し、非白人キャラクターを周縁化する構造を持つ。特にキラユーテ族の描写においては、衝動的で理性に欠け、野生的な存在として描かれる傾向があり、白人性との対比によってその境界性が際立つ。Burke Museum の分析でも、映画版のジェイコブは、常に上半身裸で蒸気を上げながら登場し、赤褐色の肌や裸の胸、古びたカットオフジーンズといった衣装設定が、性的でエキゾチックなイメージを喚起していると指摘されている。物語後半では、キラユーテ族の少年たちが怒りに任せて狼に変身したり、食卓で粗野に振る舞ったりする場面が描かれ、彼らの身体性や集団性が過度に衝動的なものとして描かれている。これらの演出は、先住民の身体を衝動的かつ野性的な対象として消費する視線が組み込まれていることを示している。

文化的背景の扱いにも問題がある。キラユーテ族の实在の神話や歴史は、物語の中でファンタジー設定として簡略化され、文化の厚みが十分に反映されていない（Bolwijn 5-6）。この文化的な背景の歪曲の延長線上に、ジェイコブの狼男としての設定がある。この点は、第2章で論じた『ハリー・ポッター』に登場する狼人間との直接的な比較が可能である。そこでは、理性を内面化し、他者に無害性を示すことで社会に受容されよ

うとするルーピンと、暴力性や従属の立場を体現し、排除の対象となるグレイバックという二極化された表象が描かれていた。ジェイコブの描写は、後者の持つ制御不能な衝動性や周縁性に近く、理性による抑制よりも身体性や集団性が強調されることで、物語の中でも中心から外れた立場に置かれる。しかし、『ハリー・ポッター』の異質な存在がイギリスの血統主義や階級といった差別構造を反映していたのに対し、『トワイライト』ではアメリカ先住民表象の歴史的なステレオタイプが影響している。つまり、怪物性が社会からどう扱われるかは、作品の文化的・歴史的な背景によって大きく左右される。

以上の点を踏まえると、ジェイコブの怪物性は、文化的・人種的な他者性と結びつけられた境界的な存在として描かれており、常に周縁に位置づけられていることが分かる。彼の身体性や暴力性は、理想化されることなく、制御不能な力や衝動として描かれ、不安定な存在として扱われている。これは、抑制と道徳性によって社会に受容されるエドワードの怪物性とは明確に対照的である。エドワードが白人性・秩序・美・道徳といった側面に適合することで理想化されるのに対し、ジェイコブはその基準から逸脱しているがゆえに、怪物性が社会的承認や魅力として機能しないのである。ベラが最終的にジェイコブではなくエドワードを選ぶ展開は、物語がどのような怪物性を理想化しているのかを示している。ジェイコブは、親密で信頼できる友人でありながら、最終的には恋愛対象として選ばれない。このことは、怪物性が理想化されるためには、白人性や抑制、秩序、美といった特定の文化的条件に適合する必要があることを物語の無意識的な前提として読み取ることができる。

したがって、ジェイコブの描写は怪物性の受容が文化的・人種的な基準に基づいて選別されるものであること示している。エドワードとの対比を通じて、どのような価値観が怪物性を理想とし、何を排除するのかが可視化された。この境界化された異質性を踏まえ、次節ではベラの語りと選択に注目し、怪物性の受容がいかに文化的・ジェンダー的価値が影響しているかを検討する。

3-4 ベラ・スワン：選択と代償

本節では、主人公であるベラの行動と選択に焦点を当てる。彼女の選択を通じて、作品が肯定する社会的・文化的理想を検討していく。ベラは、白人性と理性を象徴するエ

ドワードと、野性的で先住民の血を引くジェイコブという、対照的な存在の間で揺れ動く。最終的にベラがエドワードを選び、吸血鬼となる展開は、本章全体を通じて示してきた特権的な理想像を選び取ることを意味している。しかしその選択は、彼女にとって大きな代償を伴うものとして描かれる。これは、ベラが人間であることや女性的自律といった価値観を放棄することを意味している。彼女の愛と願望は、人間社会の次元を超えた理想化された価値観として置き換えられる一方で、現実社会において女性が直面する身体性や家族といった制約からの逃避としても機能している。

具体的に、怪物性の受容が文化的・社会的な理想像に基づいて構築されていることを明らかにするために、以下ではベラが異質性を受け入れていく過程を通して、その条件を検討していく。彼女の視点で物語が描かれるという構造は、異質性に対する社会の価値判断の基準を可視化するものとして機能している。特に白人性、ジェンダー規範といった要素が、怪物性の理想化や排除にどのように関与しているかを読み解いていく。

Biasi は、2000 年代後半のアメリカ社会においては、ポストフェミニズム的な文化の中で、伝統的な性別役割や家族観が肯定的に描かれる傾向があり、『トワイライト』シリーズもその価値観を前提とし、それらを再生産していると指摘する (6-7)。彼女は本シリーズを“classic prince charming fairy tale”と位置付け、ベラを自己犠牲的かつ受動的な人物として描いている点を強調している。これは、読者に親しみや安心感を提供する一方で、伝統的なジェンダー規範を維持する役割を果たしているという。こうした価値観を肯定しつつ、女性の自己実現を恋愛に結び付けて描く点は、ポストフェミニズム的な価値観の二面性を体現している。実際、ベラがエドワードを理想化し、吸血鬼になることを望む展開は、表面的には主体的選択のように見える。しかし、その選択は白人中心の文化への従属として描かれている。また、ベラが妻や母といった伝統的な女性役割を果たすことによつてのみ、吸血鬼としての変身とエドワードとの完全な結びつきが許されるという構造は、厳格なジェンダー規範の再提示として機能している (Rocha 267)。つまり、異質性は理性・秩序・美といった側面で社会に適合する場合にのみ受容されることが示される。

吸血鬼化の過程では、ベラは出産による死を経て吸血鬼として再生する。このプロセスは、彼女が母親になることと引き換えに怪物になることを意味する。つまり、彼女の異質性は母性や家族を守るといった道徳的望ましい理由があるからこそ、物語の中で受け

入れられていると考えられる。吸血鬼化したベラが初めてエドワードと性的・身体的・精神的に対等な存在として描かれる点からも、女性の主体性や平等は婚姻と母性という枠組みに限定されるという文化的構造が浮かび上がる（Silber 132）。ここにおいて、女性の主体性や平等は、あくまで伝統的な役割の延長線上に限定されている。

このように、本シリーズにおける怪物性の受容は、伝統的な枠組みへの従属を前提としたものであり、ベラの変身は主体的選択のように見えて、白人性と性別の基づく伝統的な役割分担に適合することでのみ許容される。物語は、ポストフェミニズム的語りの中で女性の自己実現が恋愛と家族役割に限定される構造を再生産している。

本章では、怪物性が人間性との境界に位置づけられ、文化的価値との関係によって理想化されたり排除されたりする構造を示してきた。エドワードの怪物性は、共同体に受け入れられる存在として肯定的に扱われ、ジェイコブはその枠の外に置かれたまま、周縁的な立場として描かれる。一方でベラは、怪物性の受容を可能にする場をつくる人物として描かれ、その選択が物語の価値観を定めた。彼女がエドワードを選ぶことで、物語は受け入れられる怪物性と排除される怪物性の境界線を示し、何が肯定され、何が切り捨てられるのかという選別の構造を明らかにした。

以上のように、エドワード、ジェイコブ、ベラの三者は、それぞれ異なる怪物性を体現しながら、社会の規範や秩序との交差の仕方に違いがある。エドワードは理性と節度を内面化することで、白人性と美の規範に適合し、共同体に受容される異質性を体現する。一方ジェイコブは、野性的な身体性と集団性を強調されることで、境界的な存在として周縁化される。そしてベラは、両者の間に立ち、異質性の受容の基準を定義する立場に置かれている。彼らの描写は、怪物性が単なるファンタジーの設定ではなく、アメリカ社会における人種・階級・美・ジェンダーといった文化的なヒエラルキーを可視化する装置であることを示している。

結論

本論文は、3 作品の比較を通して、怪物表象が時代ごとの社会的条件に応じて大きく変化してきたことを明らかにした。異質なキャラクターは、古典的には外部からの敵として描かれていたが、現代に近づくにつれて共同体の規範に適合しない存在として位置付けられるようになった。この変遷は、文学における怪物性が社会の不安や価値観を映し出してきたことを示している。

まず、19 世紀初頭のイギリスを舞台とする『フランケンシュタイン』では、モンスターが創造主の倫理的欠落と責任放棄、そして外見差別の連鎖によって、社会全体から排除される制御不能な存在として描かれている。これは、帝国主義社会が抱えていた不安やジェンダー的な恐怖を体現する古典的な怪物像であり、外見の異様さそのものが社会からの拒絶と暴力を必然的に招くという排除の暴力の構造を提示している。これに対し、20 世紀後半のイギリスを背景とする『ハリー・ポッター』シリーズでは、異質なキャラクターは特定の社会的スティグマのメタファーを象徴する存在として描かれている。物語では、多層的で制度化された差別の構造が際立っている。具体的には、狼人間は後天的な感染リスクを、巨人族は先天的な血統に基づく偏見を象徴している。こうした怪物性は一律に排除されるのではなく、過度な自己管理や倫理的な証明を強いられることで初めて共存の可能性が与えられる。この描写は、被差別者が内面化する苦悩を浮き彫りにすると同時に、現代社会におけるスティグマや制度的排除の問題を反映している。つまり、異質性は社会的弱者の姿を可視化する役割を担っていることを示している。そして、21 世紀初頭のアメリカを舞台とする『トワイライト』シリーズでは、怪物性が選択的理想化の対象となり得る構造が示された。吸血鬼のエドワードは、白人性、理性、中産階級的な秩序といった当時の文化的理想に適合することで、魅力的で特権的な怪物として肯定的に描かれた。一方で、先住民の血を引く狼男のジェイコブは、野性的・衝動的な存在として周縁化された。この対比は、現代社会において怪物性の受容が一樣ではなく、人種や階級の規範へ適合するか否かで選別されるという、新たな排除の形態を明らかにしている。つまり、異質なキャラクターの描写の変遷は、社会が他者を選別する仕組みが時代とともに変化してきた過程そのものを映し出している。特に『トワイライト』に見られる怪物の理想化は、現代社会が差別の存在を否定しつつ、理想像に適合する者のみを選択的に受け入れる排除の形式を示している。

本論文は、怪物性の描写が時代ごとの社会の排除と受容の境界を示していることを明らかにした。そして今後の課題としては、より広い地域・メディアへと比較対象を広げ、怪物表象が現代社会の新たな差別や不安をどのように映し出し続けるのかをより多角的に検討することである。

注

1. 19世紀末から20世紀初頭にかけて西洋世界に流布した、黄色人種とその国家、特に日本や中国の勃興が、白色人種や白人国家に対して脅威になるという考えのこと（飯倉 35）。
2. 1947年にニュート・スキヤマンダーによって作成された名簿。魔法省によって管理され、差別的な制度として狼人間の社会的な排除助長した（Rowling “Werewolves”）。
3. 魔法省が狼人間の行動を制限するために定めた規則であり、彼らの自由を著しく制限する差別的な法令（Rowling “Werewolves”）。
4. アメリカ・ワシントン州に居住する実在の先住民部族。『トワイライト』シリーズでは、狼男の伝承を受け継ぐ部族として描かれているが、実際の文化的背景は簡略化され、戦闘的で衝動的な怪物として再構成されている（Burke Museum）。

引用文献

- Adams, Carol, J. *The Sexual Politics of Meat: A Feminist-Vegetarian Critical Theory*. 1990. 20th Anniversary ed., Continuum Press, 2010.
- Alvarez, Estefania. “The Stigmatization of Frankenstein’s Monster” *Dawson English Journal*, No.11, 2020. <https://www.dawsonenglishjournal.ca/article/the-stigmatization-of-frankensteins-monster/>
- Biasi, Anna Maria. “（Anti-）Feminism in Stephenie Meyer’s *Twilight Saga*.” Universität Innsbruck, 2024. <https://ulb-dok.uibk.ac.at/ulbtirolhs/content/titleinfo/10443423>
- Bolwijn, Fransje. “The Depiction of the Quileute Tribe in the *Twilight Saga*: The Way Native Americans Are Represented in Popular Media.” Undergraduate thesis, Utrecht University, 2018.

[https://www.academia.edu/36073664/The Depiction of the Quileute Tribe in the Twilight Saga](https://www.academia.edu/36073664/The_Depiction_of_the_Quileute_Tribe_in_the_Twilight_Saga)

Burke Museum. "Racial and Class Stereotypes in *Twilight*." *Truth vs. Twilight*, Burke Museum of Natural History and Culture, 2010.

https://www.burkemuseum.org/static/truth_vs_twilight/facts.html

Duncan, Guy. "It's a Sin: The 1980s Were a Time When Young Gay Men Were Turned into Something to Fear." *National AIDS Trust*, 29 Jan. 2021, <https://nat.org.uk/views/its-a-sin-the-1980s-were-a-time-when-young-gay-men-were-turned-into-something-to-fear/>

Eichmiller, Jaid M. "I'm Absolutely Ordinary: Bella and Her Perception of Gender within *Twilight*." Portland State University, 2020.

<https://pdxscholar.library.pdx.edu/honorstheses/955/>

Goodison, Natalie. "Rubeus Hagrid: The Resolution of Contraries, Part 1: Giant, Wild Man, and Saint." *The Year's Work in Medievalism*, vol.36-36, edited by Valerie B. Johnson and Renée Ward, 2020-2021, pp. 125-35. <https://ywim.net/ywim-35-36/>

Gupta, Sonal, Kaushal Yadav. "Victor and His Monster: The Projection of Alter Ego in Mary Shelley's *Frankenstein*." *International Journal of Research and Analytical Reviews (IJRAR)* , vol. 10, no. 3, 2023, pp. 816-24.

https://ijrar.org/viewfull.php?&p_id=IJRAR23C1598

Halberstam, Judith. *In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives*. E-book ed., New York University Press, 2005.

Hedge, Barbara, Karrish Devan, Jose Catalan, Anna Cheshire, and Damien Ridge. "HIV-Related Stigma in the UK Then and Now: To What Extent Are We on Track to Eliminate Stigma? A Qualitative Investigation." *BMC Public Health*, vol. 21, article 1022, 2021. <https://rdcu.be/eLCk0>

Herbert, Rory. "The Homophobic Response to the AIDS Crisis in the 1980s." *The Gale Review*, Jan. 2022, <https://review.gale.com/2017/05/17/the-homophobic-aids-crisis-of-the-1980s/>

Horne, Jackie C. "Harry and the Other: Answering the Race Question in J. K. Rowling's *Harry Potter*." *The Lion and the Unicorn*, vol. 34, no. 1, Johns Hopkins University Press,

2010, pp. 76-104.

https://www.researchgate.net/publication/236812192_Harry_and_the_Other_Answering_the_Race_Question_in_J_K_Rowling's_Harry_Potter

Jacobs, Tom. "Harry Potter and the Battle Against Bigotry." *Pacific Standard*, July 2014.

<https://psmag.com/social-justice/harry-potter-battle-bigotry-87002/>

Johnson, Barbara. "My Monster/My Self." *The Barbara Johnson Reader: The Surprise of Otherness*, edited by Melissa Feuerstein, Bill Johnson González, Lili Porten, and Keja L. Valens, Duke University Press, 2014.

Lavater, Johann Caspar. *Essays on Physiognomy: Designed to Promote the Knowledge and the Love of Mankind*. Translated by Thomas Holcroft, 8th ed., William Tegg and Co., 1853.

Lindén, Claudia. "Virtue as Adventure and Excess: Intertextuality, Masculinity, and Desire in the *Twilight* Series." *Culture Unbound*, vol.5, no.2, 2013, pp. 213-17.

<https://cultureunbound.ep.liu.se/article/view/2046>

Mellor, Anne K. "Making a Monster." *The Cambridge Companion to Mary Shelley*, edited by Esther Schor, Cambridge University Press, E-book ed., 2006, pp. 9-25.

Phoenix, Aisha. "Colourism and the Politics of Beauty." *Feminist Review*, vol. 108, no. 1, 2014, pp. 97–105. <https://www.jstor.org/stable/24571924>

Pugh, Tison, and David L. Wallace. "Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J. K. Rowling's *Harry Potter* Series." *Children's Literature Association Quarterly*, vol.31, no.3, 2006, pp. 260-81. <https://muse.jhu.edu/article/204892>

Punter, David. *The Literature of Terror: A History of Gothic Fictions from 1765 to the Present Day*. E-book ed., Routledge, 2013.

Reimer, Sam. "Race Through Bella's Eyes: Contending Racial Depictions in *New Moon* and *Eclipse*." *Aperture*, 2015, <https://aperture.byu.edu/?p=187>

Rocha, Lauren. "Wife, Mother, Vampire: The Female Role in the *Twilight* Series." *Journal of International Women's Studies*, vol. 15, no. 2, 2014, pp. 286-98.
<https://vc.bridgew.edu/jiws/vol15/iss2/19/>

Rowling, J.K. *Short Stories from Hogwarts of Heroism, Hardship and Dangerous Hobbies*. Pottermore, 2016.

---. "Werewolves." *Harry Potter Official Website*, 10 Aug. 2015.

<https://www.harrypotter.com/ja/writing-by-jk-rowling/werewolves>

Shelley, Mary. *Frankenstein: The 1818 Text*. E-book ed., Penguin Classics, 2018.

---. "Introduction," *Frankenstein: Or, the Modern Prometheus*. 1831. *Project Gutenberg*,

<https://www.gutenberg.org/files/42324/42324-h/42324-h.htm>

Silver, Anna. "Twilight Is Not Good for Maidens: Gender, Sexuality, and the Family in

Stephenie Meyer's *Twilight* Series." *The Young Adult Novel*, vol. 42, no.1–2, 2010,

pp. 121-38. <https://www.jstor.org/stable/29533972>

Tytler, Graeme. *Physiognomy in the European Novel: Faces and Fortunes*. Princeton University Press, 1982.

Van Oers, Raphaela. "Stigma, Prejudice, and Sympathy: British Press Coverage of HIV/AIDS in the 1980s." McGill University, 2022.

<https://escholarship.mcgill.ca/concern/theses/fx719s51z>

Vestić, Victoria. "Harry Potter, Heteronormativity and Pronatalism – the Villain as the Antinatalist." *Journal of the International Symposium of Students of English, Croatian and Italian Studies*, University of Split, 2018, pp. 168-84.

<https://repozitorij.ffst.unist.hr/object/ffst:2249>

Watkins, Naia Renee Alexis. "Unmasking Fantasy: Race and the Power of Representation in *Twilight* and Beyond." *Poet Commons*, 2025.

<https://poetcommons.whittier.edu/scholars/63>

Weston, Janet. "Aids: the epidemic that changed Britain." *History Extra*, 16 Sept. 2021.

<https://www.historyextra.com/membership/aids-hiv-epidemic-changed-britain-how/>

Wilson, Natalie. *Seduced by Twilight: The Allure and Contradictory Messages of the Popular Saga*. E-book ed., McFarland & Co., 2011.

Zurutuza, Kristian Pérez. "The Vampire as the Gender and Racial Construction of Western Capitalism's White Masculinity in English and American Gothic Literature."

International Journal of Arts and Sciences, vol.8, no.8, 2015, pp. 541-50.

https://www.academia.edu/66166789/The_Vampire_as_the_Gender_and_Racial_Construction_of_Western_Capitalisms_White_Masculinity_in_English_and_American_Got

hic Literature

- 飯倉章「「黄禍」と新日本 「黄禍」思想への対応」、『国際文化研究所紀要』第4巻、1998年、pp. 33-56。 https://libir.josai.ac.jp/il/meta_pub/G0000284repository_JOS-KJ00004422902
- 伊東剛史「近代科学の「周縁」：19世紀イギリスにおけるジェントルマン科学と気候順化」『専修大学人文科学研究所月報』第275巻、2015年、pp. 17-37。 <https://senshu-u.repo.nii.ac.jp/records/7083>
- 奥村圭子「イギリスにおけるエスニックマイノリティと多文化教育の変遷」『留学生センター紀要』第2号、2006年、pp. 4-8。
<https://yamanashi.repo.nii.ac.jp/records/646>
- 小牧秀太郎「障がい者に対する差別・偏見に関する調査」『障がい者総合研究所』2017年10月。 <https://www.gp-sri.jp/report/detail031.html>
- 佐々木真理「科学者ヴィクター・フランケンシュタイン：メアリー・シェリーは化学と科学者をどう捉えたか」『Global Studies』第1号、2017年、pp. 45-54。
<https://mu.repo.nii.ac.jp/records/877>
- シェリー、メアリー『フランケンシュタイン』小林章夫 訳、Kindle版、光文社古典新訳文庫、2010年。
- 鈴木満「19世紀イギリス社会の一側面」『関西大学経済論文集』第34巻第6号、1985年、pp.1055-74。 <https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/records/7471>
- ストーリー、ブラム『ドラキュラ』フマノヒト 訳、2023年。『日刊ドラキュラ』
<https://nikkandracula.com/category/chapter-by-chapter/>
- 武田悠一『フランケンシュタインとは何か―怪物の倫理学』彩流社、2014年。
- 武田悠一、武田美保子『増殖するフランケンシュタイン 批評とアダプテーション』彩流社、2017年。
- メイヤー、ステファニー『トワイライト 上下』小原亜美 訳、ヴィレッジブックス、2008年。
- 山田麻里「出産神話としての『フランケンシュタイン』」久守和子、中川僚子編『フランケンシュタイン』ミネルヴァ書房、2006年、pp. 62-75。
- ローリング、J.K.『ハリー・ポッターと炎のゴブレット 上』松岡佑子 訳、静山社、

2001 年。

---. 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』松岡佑子 訳、静山社、2004 年。

---. 『ハリー・ポッターと謎のプリンス 上下』松岡佑子 訳、静山社、2006 年。

---. 『ハリー・ポッターと死の秘宝 上』松岡佑子 訳、静山社、2008 年。

ローリング、J. K.、フレーザー、リンゼイ『An interview with J. K. Rowling ハリー・ポッター裏話』松岡佑子 訳、静山社、2001 年。